

ロシア

ウラジオストク開発と金融危機の中におけるダリキン知事とプシカリョフ市長の命運

早稲田大学アジア太平洋研究センター客員助教 堀内賢志

周知のように、ウラジオストクでは2012年のAPEC開催に向け、「2013年までの極東ザバイカル地域経済社会発展プログラム」のサブプログラムである「アジア太平洋地域における国際協力のセンターとしてのウラジオストク市開発」が進められている。このサブプログラムの予算額は2008年8月のプログラム改訂によって倍増され、その直後に発生した金融危機にもかかわらず基本的に維持された。その直後の金融危機を経て、2009年11月にサブプログラムは再度大幅に改訂されたが、連邦予算からの支出額はおおよそ維持され、「サハリン-ハバロフスク-ウラジオストク」天然ガスパイプラインの建設をはじめとするプロジェクトが含まれたことにより全体の予算額は当初の4倍近くにまで膨れ上がっている。ウラジオストクには金融危機の中でもこうした大規模投資が流入し続け、中古自動車ビジネスの壊滅によって生じた社会不安も2009年を通じて安定に向かった。

こうした状況に助けられたのが、沿海地方知事のダリキンである。2010年2月の任期切れを前に、ダリキンの再任はないという声は強くあった。しかし、上記のような経済・社会の安定と大規模インフラプロジェクトの現実的な進展、また、給料遅配によりハンガーストライキが起こったスヴェトログリエの採掘選鉱コンビナートの問題を解決するなど金融危機の中でのリーダーシップも評価され、「極東コンサルティングセンター」による住民の世論調査では、2009年を通じてダリキンへの支持は上昇した。2012年のAPEC開催に間に合わせるべく関連施設の建設を急ピッチで進めなければならない中で、知事を交代させるリスクを避けたいという判断もあり、結局今年1月、ダリキンの再任が大統領によって提案され、沿海地方議会の多数によって承認されるに至った。特にダリキン再任の理由として、極東コンサルティングセンター所長のハナスが強調したのは、諸利害の調整者・仲介者としてのダリキンの重要性である。大規模投資が進む中で様々な経済グループ間の利害を取り持ち、金融危機の中で労働組合との協調関係を築き、プーチン、メドベージェフをはじめとするモスクワの人物たちとも良好な関係を築くなど、諸利害の調整や開発プロジェクトの実施において彼が重要な位置を占めるに至っていたということである。

対照的であるのが、ウラジオストク市長のプシカリョフである。2008年の市長選で、ソ連崩壊後の沿海地方・ウラジオストク市の歴史において初めて連邦中央が推す候補として当選し、またスキャンダルと裁判沙汰続きであったウラジオストク市政において、清新で有能な人物として彼に期待する向きは多かった。しかしその後、彼の統治能力には疑問符が付けられることとなる。とりわけ、除雪作業の滞りによってウラジオストクの交通を麻痺させたことは、住民からも連邦中央からも強い批判を受けた。1000万ルーブルをかけて中央広場に飾られた巨大な新年のツリーが一昼夜もしないうちに倒壊したことは、すでに語り草となった。外国自動車輸入関税引き上げに反対する住民の大規模抗議行動に対し、「ソロス財団に支援されている」などと決めつけ、OMONによる鎮圧を正当化する発言をしたことなどは、住民の怒りと失望を買った。ダリキンとは逆に、プシカリョフへの支持は急激に低下していった。APECに向けた開発の進展においても、市政府の貢献を評価する声はきわめて少ない。共産党ウラジオストク支部とロシア自動車所有者連盟沿海地方支部は、プシカリョフの辞任を求める約2万人の署名を集め、市議会と大統領府に提出している。

プシカリョフが当選した2年前の市長選の時、一方のダリキンは詐欺容疑で拘留中だった前第一副知事の事件に関連して自宅と執務室の捜査を受け、その辞任が時間の問題だとも言われていた。それを思えば、両者に対するクレムリンとウラジオストク住民の評価がこのように逆転していることは、きわめて皮肉な展開と言わざるを得ない。

プシカリョフが統治に失敗している主要因の一つとして、市政府に有能かつ忠実な幹部スタッフを揃えることができなかったことが指摘されている。2年間の間に副市長がめまぐるしく交代し、また、かつてのダリキンの部下であり職権乱用の嫌疑で辞職した元沿海地方副知事を市政府の幹部に登用せざるを得なかったなどことは、「外様」としてのプシカリョフの弱みを露呈したものと言える。両者の命運は、ウラジオストクのように諸々の利害が複雑に絡み合いぶつかり合う地において、現地の権力構造と無縁な外部の人物を送り込み統治させることがいかに困難であるかを示しているのかもしれない。